

ムラ社会とOBペンクラブ

首藤 静夫

先月の「何でも書こう会」、MSさんが「ムラ社会の意識構造」と題し、わが国の農業社会におけるムラの起源と特徴を説いておられた。一言でいうなら、集団主義と全体責任が基本のようだ。現在の日本でも根強く残っていると指摘されていた。

これを読みながら、以前「何でも読もう会」で取り上げた宮本常一の『忘れられた日本人』の一節を思い出した。

終戦後、氏は民俗学の調査研究のため対馬に渡る。そこで土地の古老から諸々の由来や慣習について聞き取りをした。思い出したのはその中の一節である。要約すると――

古文書を写しきれないので借りたいと氏が区長に申し出た。「寄り合い」に諮るからといわれる。返事がなかなか来ない。区長に連れられて寄り合いの場に行った。会場に二十人ばかり、周りの樹に数人ずつ寄り掛かり話し合っている。すでに二日、何時まで続くかわらないという。終わりの刻限がないのだ。氏が頼んだ話も朝方に出、文書の古い話題に広がりつつ、いまは別の話に移っている。途中食事に帰る者、眠る者もいる。話し合いは自在に行き来しながら結論が出るまで続けられた――。

冒頭のムラの起源も、全員が納得するまで延々と話し合われたであろう。納得といっても、心から納得するかは別問題だ。古老や有力者の意見、場の雰囲気、根気疲れなどで、まあ仕方ないかという場面も多かったことだろう。しかし、短時間で打ち切られた、多数意見に押し切られたという現代社会とは趣が異なっていただろう。

当OBペンクラブもムラ社会に似ている。東京のド真ん中で活動しながら、このムラの雰囲気は何だろう。多数決はアフター5の飲み屋を決めるくらい。何時までに決定という、はつきりしたことも少ない。原稿の締切りくらいか。時間が経過し、物事が何となく自然に決まっていく。

ホットな議論があってもアフター5の懇親ワインで、わだかまりはなくなる。この最後のプロセスが大事なのに、何時やったきりだろう。